図書紹介

ナタウット・スッティソンクラーム『元帥ナコーンサワンウォーラピニット親王，最初の海軍省大臣，の偉勲と伝記』 Bangkok, 1965. 905 p.

ณัฐวุฒิ สุทธิสงคราม พระเกียรติประวัติ ของจอมพลเรือ จอมพล สมเด็จเจ้าฟ้า ฯ กรมพระนครสวรรค์วรพินิต เสนาบดีกระทรวงทหารเรือพระองค์แรก

タイ国が1932年の立憲クーデターを契機として，近代から現代に移行したというとき，いうまでもなく，そのクーデターのトレーガーとなった人民党が，現代史開幕当初の主人公として，もっとも注目を集めるのは当然である。しかし，1932年以降の現代史の性格を探るために，人民党以上に問題とされねばならないのは，その人民党が打倒した絶対王制の政治的性格である。表面上は，人民党は絶対王制という時代錯誤的政体への観念的挑戦をなしたかのようにみえる。しかし，事実ははたしてそうであったか。

従来のタイ国近代史あるいは現代史にもっとも欠けていたのは，絶対王制を担った人的要素，国王および王族のたち入った研究である。ラーマ6世や7世についてはいちおうの知識が蓄積されたといってよい。しかし，人民党はかならずしもラーマ7世を，絶対王制の非合理性の象徴として毛嫌いしはしなかった。ラーマ6,7世統治下のシャム(1910年以降)の権力関係を，専制王制というたてまえにとらわれて，国王権力の優位性ということで割り切ろうとするのは大きな間違いだ。

本書は，そういう歴史的な文脈のなかで，もっとも注目されねばならない人物，ナコーンサワン親王の伝記である。ナコーンサワン親王は，絶対王制の末期段階で，事実上国王以上の権力をふるい，万人に恐れられた大物政治家である。ラーマ7世は，親王に完全に一目置いていた。それだけに，1925年以降のシャムの政治指導が，どこまで7世自身の主体性に基づくものか，ナコーンサワン親王の介入に基づくものか，今後くわしい検討を要する点である。人民党革命後，人民党によって国外追放を喰ったのは，このナコーンサワンただ1人であった。人民党がマークしていたのは，実はラーマ7世ではなく，ナコーンサワン親王であった。

ナコーンサワン親王の伝記は，これまで数冊いろいろな形で出ていたが，これほど詳細をきわめているのははじめてではないか。内容を見よう。

第1章　両親
第2章　幼若のみぎり
第3章　官僚となる
第4章　最高顧問・軍事大臣・内務大臣
第5章　2475年6月24日の早暁

と，5章構成をとっている。ナコーンサワンの経歴はこのなかに一切記録されてある。そのほか，文中に，かなりの文献が引用されてあり，参考になる。

すべてのタイの伝記書とおなじく，内的連関性を欠く事実の羅列よりなり，面白みを欠くのはいたしかたない。そして，特に残念なのは，親王の経歴を刻明に追うに急で，政治史的背景や，ナコーンサワンの権力的比重などの，諸多の要素との関連やバランスへの配慮がないことである。

著者のナタウットは，同じたぐいの伝記を多数ものしている人物だ。あるいは，王族関係者からの依頼により執筆しているのかもしれない。冒頭の序文を見ると，原稿に遺族が目を通した旨記してある。

しかし，そういった問題点をせんさくするよりも，このような重要人物についてのくわしい伝記が，1冊でも増えたことのほうを喜びたい。ラーマ4世にはじまるチャクリー改革の遺産の上にのっかって，この世代の王族がどのような政治意識をもつに至ったのかが，1932年革命の前史に関連して，今後総合的に究められねばならない重要な課題なのである。ラーマ7世よりも，このナコーンサワン親王のほうが政治的比重が高かったということを，改めて強調しておこう。

（矢野　暢）